

あそび 7
2020



須賀忠男のBird Note

秋山郷の
雨やで
トボが
月の前にも
ヨボシトボ
と確認



あそ

七月集

佐藤 喜孝

通し鴨

早春の築地川から隅田川
坂上のいぬふぐり坂下のいぬふぐり
てのひらになったすまほに花の顔



けふは海けふは松ヶ枝春の月
卯のはなくだし外はコビット内ピロリ
かしぎたる柱掛には晝寝の句
ポケットのどこかに切符通し鴨
着ながしに縁のなけれど橋すゞみ
赤のまゝ、縄文土器に顔あふれ
さういへばちいさな手だったほたる艸



東京

須賀 敏子

テレワーク

テレワークそつと新茶を淹れにけり
薔薇を見て暫しコロナ禍忘れけり
客疎ら薄暑の街を西武線
夜半の風定家葛の花散らし
籠る日の豆をことごと街薄暑

東京

田中 藤穂

古茶いれて

青しぐれ鳥籠は戸の開いたまま
夕散歩ホタルブクロとゆきあひし
古茶いれて誰彼となく逢ひたき日
銀杏の花いつも気付かず墓地の道
コロナ一波終息宣言髪洗ふ

三重

長崎 桂子

蝶

風青し獅子頭厄払ひ臨時祭
気怠さに真珠色なり春夕
土手は燦燦飛び交ふ紋白蝶
風薫る高校庭に球音なし
自粛に夏満月大ききくうるはし

東京

森 なほ子

杉落葉

照り渡るスーパームーン若葉冷
突風が山ごと揺らし五月来る
故里の鎮守の森の杉落葉
大きな房踏めば弾力杉落葉
鉛筆に残る噛み跡子供の日



東京

赤座 典子

夏芝居

久々の鎖国に美しきフラワームーン
日替りの都知事のマスク薄暑かな
騒動に仰け反りて咲く鉄線花
端午の日マスクの孫と小半時
規制緩和再開を待つ夏芝居

埼玉

秋川 泉

天皇賞

芍薬のふれたる父の墨衣
雨上がるねぼけまなこの雨蛙
自転車でカーネーションの走り去る
巣籠りの朝ほつくりと豆御飯
薫風や天皇賞は鼻の差で

埼玉

大日向幸江

月見草

青い眼の見つめる先に武者幟
蟻ん子に居心地抜群密の地下
雀の子飛んでたちまち母を呼び
修行僧の髪剃り落す薄暑かな
夕方の客に活けるや月見草

東京

七郎衛門吉保

五月

武者飾り相撲の取れぬ金太郎
藤蔓の探す安寧夏兆す
花茎摘み美のふたたびや花菖蒲
コーヒーのカップに新茶演歌聴く
再のつく番組ばかり五月尽



東京

篠田 純子

不条理

不条理に慣れてゆく日々柿若葉
食紅の舌を見せ合ふ夜店の灯
密密の山査子の花頬寄する
親ほどの子すずめ親に付き食餌
五尺二寸五分の孫の背風あをし

東京

篠田 大佳

熱

ケトルまだ熱があるなり夏始
イヤホンの白きに蠅の止まるかな
密室の金魚のひれのみどりいろ
封筒に土地のにはひや夏の雲
白シャツの白の淡くて出勤す

甘藍

佐藤 恭子

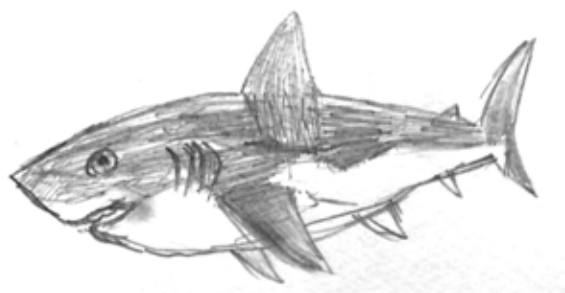
甘藍を二つかかへて歩道橋
浄妙寺手桶のひとつ額の花
大股の尼僧の素足色蹴出し
ふと風の止まりしことも赤蜻蛉
おほぞらに風がおきゆく鱗雲



無患子の花散る古き石の上 佐藤 喜孝
助手席でぬひぐるみ抱き目借時 篠田 大佳
蛙塗って風新しく走りだす 定梶じょう
ハイキング句会も無くて四月尽 須賀 敏子
春寒し阿修羅の像の細き腕 田中 藤穂
外出を控へる日に菜種梅雨 長崎 桂子
ウイルスに分断されて卒業す 森 なほ子



桜の芽は陣中見舞小諸より 赤座 典子
生まれたて春の満月もも色に 秋川 泉
花の雨気ままに部屋の模様変へ 大日向幸江
春嵐 二転 三転 暗転す 七郎衛門吉保
孫と読むカミユのペスト四月尽 篠田 純子
鳴いてるか笑ってるか蜆汁 佐藤 恭子



朝涼の寺に連れ出す夜泣きの子

佐藤喜孝

どうしても泣き止まない子を、早朝、近くのお寺まで連れて行きました。おんぶされていたか、今風に抱っこ紐のなかにいたのか、その子は広々とした静かな境内で、無事に泣き止み、眠ってしまったことでしょう。家の中とは違う、しみじみとした空気を気に入ってしまったって、また行きたいと、夜泣きされても困りますね。(典子)

マスクしてうつ向きがちの春の町

大日向幸江

誰もがマスクを離せなくなつてから、何カ月が経つことでしょう。まっすぐ前や真上の空をも見にくくなった町は、全体が俯いているようです。身も心も上を向いて、堂々と歩ける日が来ることを切に願って、時々空をしっかりと見つめるよう、心掛けたいものです。(典子)

原発の反対デモや東風の中

須賀敏子

何事にも、即実行に移す敏子さんには、本当に敬服です。今回は原発反対のデモに参加されました。昨秋、国会議事堂近くを、バスで通ったことがあって、両陛下即位パレードの当日でしたが、シュ

プレヒコールをあげている、かなりの人数の人に衝撃を受けました。その後メディアの報道もありませんでした。今していることが選挙の投票だけという、消極的な自分に反省です。(典子)

もやし の 根 と り 春 愁 を 深 め を り

田中藤穂

知人に「結構大変なのよね」と言いながらも、もやし の 根 を し っ か り 取 り き っ て、色々料理を作る人がいます。時間のかかる作業をひたすら続けていると、最近の状況について考えてしまいます。この春愁には、終わりがいつ来るのでしょうか。でも藤穂さんは、持ち前の強さで、乗り切つて、私たちに、見本を示して下さいと思っています。(典子)

先づうがひ手洗ひをして春寒し

森なほ子

旅をして珍しい景色に出会い、美しいものを愛で、その土地の美味しいものを頂く。そんな非日常の中でも、最優先はうがい、手洗い。この大切な習慣を、危機感を持つことなく、行使できる日が、一日も早く来るようにと、願っています。その時には、「春寒し」ではなくなることでしょう。

(典子)

春きざす文庫本読むホームレス

篠田大佳

春の気配が感じられるようになって、寒さからも解放され、本を読む余裕が出来たのでしょうか。

手軽な大きさの文庫本で読まれたのは、今年四月に大增刷された、カミュの「ペスト」でしょうか、それとも気軽に読み終わる「ライトノベル」の類だったのでしょうか。ゆったりとした雰囲気を感じられます。(典子)

晝寝から手足ひきずりだす時間 佐藤喜孝

愛用本の昼寝の句は、芭蕉を筆頭に五十一句。十九句目に「次々と手足生えきて昼寝覚」を見つけた。詠み手は沢井我来さん。ネットで我来さんを探してみたら、偶然にも昭和十七年生れで同年代。俳句結社「貝の会」の主宰で兵庫県俳句協会会長の女性俳人であった。両句とも、昼寝から覚める一寸前の様態と時間を、同じような感覚で詠んでいるようにみえた。句を知り詠み手も知った。

(吉保)

鶯鳴くや先ゆくひとの柳腰 秋川 泉

柳腰「細くてしなやかな腰つき」この一言に誘われて、男の視点からこの句を選んでしまった。柳腰を詠んだ句は、他にどのような句があるのだろうか。喜孝さん分かったら教えてください。「鶯鳴くや」との詠みを考えてみた。ウイキペディアに「ヒーホーと口笛のような鳴き声」とある。先ゆく人の柳腰をみて、ヒーホーと口笛を吹いているとしたら、これ正しく男の視点の選択。(吉保)

我渾名オリーブオイル蒔草 篠田純子

現役時代の同僚に「オリーブさん」との愛称で呼ばれる女性職員と、一緒に仕事をしたことがある。アメリカン・コミック「ポパイ」に登場する、ポパイの恋人がオリーブ。オリーブのキャラクターを地で行くような、彼女の行動と性格は、職場で話題を欠くことはなかった。話題の種に勿論のことのように、蒔草は度々登場していた記憶がある。作者はオリーブキャラクターを、今でも發揮されているのだろうか。(吉保)

戦争かめばる煮たれば目玉落ち 定樞じょう

二人だけの夕食の最近は、「今晚何食べる？」の会話からスタートし、食材調達に向く事が多くなった。一月ほど前「煮魚が食べたいね」になった。自宅のほど近くに、昔ながらの店構えと、売り方をしている鮮魚店がある。その日の大将の、煮魚一番お勧めが「眼張」だった。大将の下拵えで、腸類と頭は落とされていたので、「目玉落ち」は見られなかったが、引き締まった身に、「美味しいね」を何回も繰り返した。(吉保)

春雷や地球の毒を消し賜もれ 長崎 桂子

トランプ米国大統領の悪口を書く。今回の疫下問題は人間の判断と行動に対して、地球からレッ

ドカードの一枚ではと考えている。地球の温暖化なども深く関わった警笛の一つでは。その対応には世界の英知と協力が不可欠。にも拘らずトランプ大統領は温暖化対策会議から脱退し、WHOからの脱退も仄めかしている。愚かなリーダーも消してくれるよう、春雷に願わざるを得ない。(吉保)

春愁なんぞと夫買うてくる花いっぱい 赤座典子

花を買ふと云へば若い頃読んだ啄木の歌をまつ思ひだす。啄木の歌は淋しくなるが、それでも花を買ってくる相手がある。典子さんの句はご夫婦ともに元気はつらつ、お洒落にも気を使はれてゐる。花いっぱいでお部屋を飾る。春愁の入り込む隙間もない。さういへば対極の一句を思ひだした。

百万本いいえ一本の薔薇でいい 須賀敏子

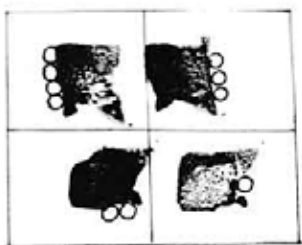
(喜孝)

志木街道歩道に威張る落椿 七郎衛門吉保

云はれば椿の花は地上に落ちても存在感がある。歩道にあれば踏むのものはばかられる。「威張る」も作者ならではの表現。未知の「志木街道」もこのやうに詠まれると風情があり尋ねてみたくなるから不思議。(喜孝)



佐藤喜孝



須賀敏子

梅檀の花伸びやかに東川
川岸に野菜スタンド浅き夏
鴨足草十葉の花野仏に

◎近くの公立小学校の校庭に二宮尊徳像と梅檀の樹がある。古い学校である。今年学校が建替中で梅檀の花を見に行けなかった。像と樹は遺つてゐるだらうか。「伸びやかに」は梅檀の花にふさはしいと思ふ。句に地名を使ふときは大方知名度がある。知名度がなくともインパクトのある地名が働くこともある。そこで詠んだので使つた、思ひ入れのある場所などとさまざまである。この句の「東川」は印象が弱い。

◎新語や見慣れぬ言葉は一応調べる。分かつたつもりで読むと大恥をかく。「スタンド」には幾つもの意味がある。そのうちの一つに「屋台式売店」があった。横文字に弱い私にはネット様様。作り手が売つてゐるのかもしれない。街中では無く「川岸」が面白い。お客さんが来るのだらうか。

季語が少しそっけないと思った。

◎野仏にだれが供へたのだらうか。もしかしたら子供かも知れぬ。辺りに咲いてゐた花であらう。どちらの白い清楚な花。作者もほほゑましく思つて詠まれた一句。

田中藤穂

蔦茂る崖でありしに改装す

ヨーヨー売銀座に夜店ありし頃

泰山木の花部屋に活け人を待つ

◎古くて崖が危険になつたので改装するであらうか。作者は改装される訳はわかつてはゐるのだが、やはり積み重なつた時間が剥がされるやうで心痛めてゐるのであらう。「ありしに」で止めたところは流石である。作者のお住まゐの田端駅の辺りには高い崖があり蔦が下がり、風で揺れてコンパスで描いたように崖を擦つた跡がついてゐる。捨てがたい風情である。

◎回想の句である。私もさうだが五十年前のことも二十年前のことも「古い」といふことでは同じやうなもの。きのふと同じことなのである。懐かしいことをふと思ひだし生き生きと、ありありと

詠むのも楽しいこと。成功した一句になればなほさら。

◎手元で、または家の中で泰山木の花を見たら圧倒的な存在感のある花ではないかと想像する。さぞや大切な方が訪ねてこられるのであらう。この句は「人を待つ」と泰山木の花をドラマの背景にされた。泰山木の花を前面に押し出して欲しかったと思ふ。

長崎桂子

夢覚めし鞆の浦にて桜鯛

青嵐郵便受けに動く物

金魚草敷地ぐるりと赤白黄

◎よき夢らしい。色彩豊かで豪華な夢だ。夢から覚めてもしばらくは夢心地であつたらう。作品もすつきりとして好い。

◎この句を読んですぐ思ひ出したのが先日見たテレビ映像である。野鳥が郵便受けに巣を作つてしまひ、その家の主が優しく見守り巣立ちを喜んでゐた。この句の「動く物」は鳥とは違ふかも知れな

いが私はさう読んで楽しんだ。

◎天国かはたまた竜宮城かとおもふお住まぬのである。作者自身が作り上げた桃源郷である。こんな句を私も作りたい。

今月の三句はコロナでの鬱陶しさを払拭してくれた。

森なほ子

たまゆらや乙女は母に花は葉に

裏川の水たつぷりと緑の夜

雪女ふと眼を覚ます緑の夜

◎句意は「光陰矢の如し」と同意であらうか。しかし今の世多様化で「乙女は母に」を素直に受け止められぬやうになった。いまの世情も人情もたまゆらである。

◎裏川（うらがは）といふ川は六本日本に流れてゐる。この句の裏川は「うらかは」で「裏の川」の意と思ふ。旅の一夜かも知れぬ。ゆったりとした季語に抱かれた夜である。しかしこの稿を書いてゐる七月中旬では「たつぷり」が違ふ意におもへてくるのが恐ろしい。

◎冬以外は雪をんなはだう暮らしてゐるのだらう。この句からとんでもない空想をしてしまった。句を読むとどうも雪女は夏眠をするやうだ。二句の「緑の夜」はイメージが膨らむ。

赤座典子

荏苒と日を送りをる草茂る

風鈴や特別編といふ再放送

若楓葉脈天を指し示す

◎あるときの作者のありやうを「草茂る」が見事に象徴してゐる。コロナ禍をきつかけに作られた句であるかも知れぬが、コロナと切り離しても立ってゐる句である。様々な俳誌にコロナをきつかけに作られたと伺へる句を見かける。忖度しなければ難解な句を多く見かける。「集うこと語り合うことなき葉むくひ」。

◎この句は前句で述べた忖度が要る。

◎作者の植物への観察力を信頼してゐる。ただこの句人に伝はるかだうかは問題。読者であるわたしには難しかった。

秋川 泉

五月雨や猫の昼寝も長くなり

薔薇届く黄金色の包み紙

筍のコロツケじゅっと黄金色

◎「昼寝も」の「も」は何と比べられたのか。「猫の昼寝の」の方が落ちつく。雨の中外出もかなはずいつもの昼寝より長くなったと見たのだらう。

◎薔薇の花束が届いた。お祝ひの気持ちだらう。包み紙の色で弥が上にもテンションが上がる。幸せいっぱいな句である。

◎こちらはこがね色。小判を連想する響きである。好きな季節の筍も入ってゐる。「じゅっ」といふ音が耳元で聞こえてきた。垂涎の一句である。

大日向幸江

どぼんどぼん滝に刃向かふ鯉の群

水無月にまたがり自粛噛みしめる

どら焼に舌喜ばす新茶汲む

◎鯉の滝登りは日本画の画題にもあるが、本当なのだらうか。この句は正に鯉が滝に刃向かつてゐる。「どぼんどぼん」はその場にあるやうな気にさせる擬音だ。珍しい場面を的確に表現してゐて楽しく読めた。

◎コロナウイルス関連の句と思ふ。

◎あまりに絵に描いたやうなハッピーな光景。誰でもが感じるがゆゑの弱さがある。「どら焼に新

茶を淹れて〇〇〇〇」とか。

七郎衛吉保

緑葉に満天の紅花石榴

四十雀外出はまだと繰り返す

風鈴の鳴る道のあり風の道

◎石榴の緑葉を空と見立て、石榴の花を星に見立てた句。石榴の花に思ひ入れの深い意欲作である。「緑葉」は「みどり」は「と詠むのだらうがまだ生でこなれてゐない。

◎庭で四十雀がツーパーペと鳴いてゐる。外出はまだ早いですよと作者には鳴いてゐるやうに聞こえる。予後又は怪我をされたのかもしれない。直近だとコロナウイルス騒ぎのことかもしれない。

◎「道」といふ同じ語彙を使ひかけた句。洒落たつくりである。

篠田大佳

少年のこゑのクラージュ夏落葉

母の日や浪費するなと母の云ふ

花榊月の裏にも所有権

◎カラージュとは絵画の表現法の一つである。複数の少年の様々なこゑをカラージュと詠まれたのだらうか。確信は持てないが公園などでの開放された少年たちのさざめきが聞こえてくる。

◎句意は明瞭。なんとも夢のない母親である。と一読思ったが、常日頃から子供からの感謝の思ひが以心伝心伝はっているのである。お金を使つて形に表はす必要はないよといふことである。クールで温かい句。

◎国連が決めた宇宙法いふものがあり国家のわがままを制限してゐるらしい。月の土地は国家が勝手に所有してはいけない法律があるらしい。国際司法裁判所の裁定さへクソ喰らへと破り捨てる国もあることだから……。などと書いてゐたら淋しくなった。榊の花は目立たぬ白い花で、六月ごろ咲くといふ。まさに神頼みである。「榊」は漢字ではなく国字である。



祈

長崎桂子

晴天が暫く続き乾燥の故なのか少々疲れて、一雨欲しいと思います。又、眠っている時に激しい雨音で目を覚ました時には、大丈夫かしらと不安と恐怖心が出て来て落着きを無くします。

願わくは、災害をもたらす大雨でなく、田畑を潤す恵みの雨であつて下さいと、お祈りを致します。

弟

秋川 泉

「雨にぬれてはいけないよ」「ホウシャノウの雨が降るからね」「雨にぬれてはいけないよ」。

井伏鱒二『黒い雨』さながら末の弟は二、三歳の頃、紫斑病と云う病に侵され生死をさ迷い長い入院生活を送った。生命は取り留めたものの病弱で通学出来ず、一時は寄宿舎のある小学校にいた。治療と父母の深い祈りのお陰で幸いにも今は元気に生かされている。私は幼いながらも雨に濡れることの恐怖「雨にぬれてはいけないよ」と父が何度も云つた事が忘れられない。

武漢

柳絮飛ぶ武漢の風邪は拡がれり 田中 藤穂
 ぶかぶかと踏む田畑に芽ぐむもの 長崎 桂子
 歩み止めフカフカフカの夏落葉 秋川 泉
ぶかぶか
 ぶかぶかと秋空沈めにはたづみ 芝 尚子
 面接のソファーぶかぶか花曇 篠田 純子
 ポストに手ぶかぶか入る春の宵 佐藤 喜孝
 ぶかぶかと変身願望冬帽子 早崎 泰江
 ぶかぶかと腕のみこむ袖湯かな 佐藤 恭子
ぶかぶか
 ぶかぶかの服着た気分小春の日 篠田 純子
 ぶかぶかの帽子と靴で花堤 赤座 典子
武器
 熟年は武器とはならず敷柑子 齊藤 裕子
 回天てふおそろしき武器敗戦す 田中 藤穂
吹きだまり
 落葉の吹きだまり残る毛虫刺す 長崎 桂子
 ビル風吹き溜る葉のうづたかし 鎌倉喜久恵
 吹きだまり又覗かせる寒雀 長崎 桂子
 春浅し虐待ニユース吹き溜る 七郎衛門吉保

服

樹の回り蚊の飛交ひし不気味かな 長崎 桂子
 侘助やときには和服着てみだし 関口 ゆき
 黒服や谷中寺町花の道 芝 尚子
 天道虫の死は道化服来たままに 栢森 定男
 秋風や古服捨つる大包 田中 藤穂
 制服に身を包みたり文化の日 篠田 大佳
 制服のビニール破る晩夏かな 山莊 慶子
 淡色の服をはおりて余寒かな 田中 藤穂
 制服の壁に吊され花曇 赤座 典子
 囀や制服の丈短くて 渡邊 友七
 指話の子のセーラー服と薔薇の花 定梶じよう
 おくさんが喪服で通る鳳仙花 竹内 弘子
 同席の喪服がにほふ木の芽どき 齊藤 裕子
 梅雨晴間三Kの服洗ひをり 田中 藤穂
 服出せば黴あり逝きし人遠し 鎌倉喜久恵
 服薬を忘れる日々や二月尽 竹内 弘子
 制服徽章朱房の喇叭黴の部屋 森山のりこ
 翡翠を写す老人迷彩服 篠田 純子
 平服のチャペルの挙式さやけしや 尚子
 お茶一服ひとりごろの春の宵芝 鎌倉喜久恵
 青嵐喪服の裾をひるがへす 鈴木多枝子
 葉桜や朝一服の緑茶かな

冬紅葉和服婦人の裾さばき 長崎 桂子
 春立つやピエロの様な衿の服 田中 藤穂
 抹香の沁みし衣服を東風に当つ 竹内 弘子
 冬桜煙草一服して去れり 赤座 典子
 冬うらら竿に揺らめくベビー服 山莊 慶子
 海鼠囀む和服の父も昭和の日 田中 藤穂
 煉瓦塀喪服行くと夏兆す 定梶じよう
 秋うららお洒落な衣服髪容 長崎 桂子
 更衣和服リメイク母を着る 須賀 敏子
 ポケットのない服を着て青芒 定梶じよう
 なつかしく夜長を子らの服を編む 長崎 桂子
 わが服よりこぼれ豊に紅の萩 田中 藤穂
 如月の洋服ダンス開きたる 長崎 桂子
 春寒し決めかねてゐる服の色 鎌倉喜久恵
 白服は腕に掛けをり書道展 早崎 泰江
 大寒や散歩の小犬厚き服 田中 藤穂
 をみならの服晴れやかに梅雨句会 定梶じよう
 喪服吾れ炎暑影なき塀に沿ふ 若者の迷彩服や冬隣 赤座 典子
 着古してまだ捨てられぬ冬の服 秋川 泉
 蓮の実が飛んで和服の父のこと 中川句寿夫
 となり家の案山子軍服よく似あふ 須賀 敏子
 花椿和服姿のモデルかな

身に入みて喪服のひとに追ひ越さる 定梶じよう
 喪服の身街に来たれば出初式 竹内 弘子
 和服著てゆくところなし亀鳴けり 定梶じよう
 喪服着て炎昼出かけねばならぬ 田中 藤穂
 初参りと和服の若きカップルら 赤座 典子
馥郁
 おばあちゃんにと供ふ芍薬馥郁と 赤座 典子
武甲山
 ゆつたりと霞の上の武甲山 須賀 敏子
 山茱萸の花の黄色に武甲山 須賀 敏子
 雲の峰武甲に近く来たりけり 須賀 敏子
 芝桜真正面に武甲山 須賀 敏子
 冠雪の武甲眩しく遍路道 須賀 敏子
 五月鯉五匹揃って武甲山 須賀 敏子
 山粧ふ武甲の嶺のまた狭く 須賀 敏子
 案山子田の遠く遠くに武甲山 須賀 敏子
房
 たおやかに藤房ゆれるとのぐもり 関口 ゆき
 山藤の濃い花房の短さよ 芝 尚子
 アッパップ箒塵取乳房揺れ 須賀 敏子
 山藤の房ほつほつと奥秩父 芝 尚子
 夕風や乳房いくつも湯にうかぶ 佐藤 恭子
 藤房の陰に三橋敏雄かな 堀内 一郎

杖軽し八重山吹を曲り来て 大山夏子

夏子さんは本来杖など全く必要を感じない足腰の達者な方です。車中で吊革にも手摺にも掴まらず平然と立ってをられたのには驚いた。それなのである。杖のある生活とはさぞや予想外のことであらう。とは云つても「杖軽し」と流石である。『集』誌には夏子さんの杖の句は見当たらない。『米寿のお祝い88』を上梓された。その中にこの句を見つけた。さう云へば八田木枯さんも「老の句は積極的に作られたが、杖」の句は見当たらなかった。

杖によりて立ち上がりけり萩の花 正岡子規
萩の花の下に屈んで鑑賞してゐる子規。さて立ち上らうとしたらすつと立ち上れない。杖にすがつて「よいしょ」と声をかけたのかもしれない。
春風の宙返りせり杖の先 村越化石

この杖は白杖。明るい句だ。私の佐藤は父方の姓。母方は村越。袖も触れ合つてはゐないのだが化石の句に出合ふと立ち止まる。

蝶飛びて其のあとに曳く老の杖 高浜虚子
杖を曳きつても蝶とたはむれる大虚子。
炎天や影より白き杖を出す 堀内一郎
「影より」は一郎さんの俳句の志向性がよく出てゐる。さすがである。

よくにほふ杖の長さの矢切葱 斧田綾子
葱の長さを杖と比した。ご本人は杖とは縁がないが、周りに使はれる人がゐたのだらう。どんな葱だと思はせるところが面白い。
杖の人に並びて春の月夜かな 宇都宮敦子
杖の人をリスペクトされてゐる。しみじみとした良い月夜だ。

杖軽し八重山吹を曲り来て 大山夏子
冒頭にも書いたが「杖軽し」と杖を突くマイナス感を感じさせない。そして中七下五とスピード感のある表現。杖など担いで歩いてゐるやうだ。杖に縋つてゐないさまが伝はつてくる。杖も各人各様である。

鳥海山

須賀敏子

一九九八年の夏、鳥海山へ登った。当日は花を楽しみ頂上では海へ沈む夕日を見ていた。しかし翌朝は雨、下山道は川の様になり時々迷いながらも何とか下山。予約していたタクシーが待っていてくれた。乗車駅近くの銭湯まで送ってもらい、総て着替えて列車に乗った。ガイドブックに「鳥海山は気象の変化の激しい山であることを忘れないように」と書いてあった。



ドミンゴ 吉津睦子

一月二十八日、朝から雨でした。当日はブランド・ドミンゴ日本での最後の公演でした。私は友人と共に国際フォーラムへ。七十八才の彼は相変わらずパワフルで夢のような美声を存分に聴かせてくれました。

私達は想定外であったその歌声と姿に嬉しい驚きでいっぱいになったのでした。

葡萄畑

大日向幸江

葡萄畑に降る雨がいつまでも記憶の底にある。
葡萄の葉は枯色になり学校から一目散に帰ってきた家は誰も居ずまだ炬燵の出ていない茶の間には窓を打ちつける雨が美しく見えた。家の裏側には葡萄畑が広がり収穫の済んだ畑には鳥の声すら聴こえなかった。雨の降り続く葡萄園は寂しさも哀しさもなかった。

あとがき

竹田の子守唄

今月の随筆のお題は「雨」。雨も降らないと大変だが降り過ぎるとこれまた災害が出てしまふ。ネットで中国の洪水のやうすをSNS動画で見えてゐた。道路が河と化しそこを一メートル余の魚が群れを成して流れに乗って泳いでゆく。それを手づかみで何人もとつてゐる。跳ねるところを待つて網を差し出す手際の良い人もゐる。大漁である。こんな面ばかりではない。老人を背負つて胸まで浸かつて救出する人、ビルがゆっくりと崩れて水流に呑み込まれるところ。街そのものが水没してゐる。そんな禍々しい映像のバックに「竹田の子守唄」が流れてゐる。初めはどこかで聞いたメロディだなおもつたが中国語で歌はれてゐるので日本の曲だと知つてびつくりした。なぜ中国の洪水映像のバックに尖閣諸島の領海侵犯をしてゐる国が日本の子守唄がと訝しんだ。調べると私の聞き違ひではなく「祈祷」といふ題で親しまれてゐること。この曲

をジュディ・オングの父が気に入り中国語の歌詞をつけた。これが臺灣で広まり、そして中国本土に広まったと。中国の人は日本の子守唄とは知らずに映像のバックに「祈祷」を流したやうだ。

「竹田の子守唄」は単純に子守歌として歌い継がれてきたわけではない。「ウィキペディア」で波乱にとんだ歴史があることを知った。しかしすべてのことを忘れ歌を聞くとしみこんでくる。「祈祷」もあるかなと思つた。

二〇二十年七月号

発行日 七月十九日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090 9828 4244

ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト

カット/須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共) / 一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)